原　著

ドメスティック・バイオレンス（DV）のある家庭に育った子どもの援助に関する一考察

三村　保子*　　力武　由美**

<要　旨>

本研究は、ドメスティック・バイオレンス(DV)にさらされている子どもとその養育環境としての被害当事者である母親とに焦点を当て、DVが特に子どもに与える影響と支援のあり方を明らかにすることを目的とする。

筆者らの心理臨床的実践を通して出会った11名の子どもの中から3名の子どもをサンプルとして取り上げ、間主観的アプローチによりその状態像を記述し、DVの影響および支援の効果について分析・考察を行った。さらに、子どもと子どもが育つ環境としての親への援助はどうあるべきかについて考察した。

その結果、以下の4点が明らかになった。1）両親間のDVにさらされることによって親に対してアンビバレンスを抱き、基本的安定感・信頼感が育っておらず、発達年齢に応じた自己表現ができない、2）被害当事者としての母親は自尊感情が低下しており、母子関係に困難を抱えている、3）DVによるトラウマに苦しみながらも、両者ともに困難を乗り越えて自分自身を回復させる心のしなやかさ（リジリアンス）を失っていない、4）リジリアンスが機能するためには社会的な支援が重要である。

キーワード:子育て環境、ドメスティック・バイオレンス、間主観的アプローチ、リジリアンス、エンパワーメント、子育て支援

Ⅰ．研究の目的

筆者らはこれまでに子どもの健全な成長を促進するための個を尊重した保育・子育て環境およびジェンダーに敏感な保育者養成の重要性を明らかにし、地域における子育て支援プログラムの作成と普及を目的とする長期的展望のもとに、研究を進めてきた。本稿では、保育・子育てにおけるドメスティッ・バイオレンス（Domestic Violence、以下DVと記す）の深刻さをふまえ、DVにさらされている子どもとその養育環境のファクターである被害当事者の母親に焦点を当て、DVが両者に与える影響と支援のあり方を明らかにする。DVが子どもに与える影響に注目され始めたのは、Peter Jaffeらが1990年に *Children of Battered Women*（『暴力被害女性の子どもたち』）を著して以降である。その後、Lundy Bancroft と Jay G. Silverman (2002) が心理臨床家としての体験を通して、子どもの情緒面、行動面、発達面におよぼす短期的・長期的影響を分析・報告している[1)]。

わが国においては、笠原ら（2005）が、DVにさらされる子どもたちの精神医学的問題についての研究を報告している。その中で、生後半年から2歳までの間、父親が母親に暴力を振るい、その後別居した家庭の子どもの事例において、その子どもは別居後半年頃から夜間の一定の時間になると覚醒して泣き始め、3歳になると「パパがママをぶってる」と訴えたことを記述している[2)]。

しかし、わが国ではDVのある家庭の子どもたちの現状については明らかにされておらず、研究をはじめ政策や支援の立ち遅れが顕著である。そのような中、ようやくDVにさらされている子どもたちの抱える問題に注意が喚起されるようになった背景には、次の2つの法律改正において重要な視点が導入されたことと連動があると言えよう。つまり、2004年改正の「児童虐待の防止等に関する法律」(2000年5月24日公布)の中で、身体的虐待、性的虐待、ネグレクトに並ぶ心

*　西南女学院大学短期大学部保育科　名誉教授
**　西南女学院大学短期大学部生活創造学科　非常勤講師

理的虐待の１つとして「DVの目撃」が加えられることになった。一方、同じく2004年改正の「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」(2001年４月13日施行）では、保護命令の範囲が、被害者と同居する子どもに拡大された。

本稿においては、DVのある家庭で育った子どもたちへのDVの影響を、間主観的アプローチにより明らかにし、どのような支援が必要であるかを考察することを目的とする。

なお、本研究の第一の中心的概念としての「ドメスティック・バイオレンス（DV)」とは、「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」に基づき、「配偶者（婚姻の届出をしていないが、事実上婚姻関係と同様の事情にあるものを含む）からの身体に対する暴力（身体に対する不法な攻撃であって生命又は身体に危害を及ぼすものを言う）又はこれに準ずる心身に有害な影響を及ぼす言動」を言う。第二の中心的概念である「リジリアンス」とは、S. J. Wolinら(1993）の定義に基づき、「苦難に耐えて自分自身を修復する力」を言う。

Ⅱ．研究の方法

本稿では、筆者らがA市の母子生活支援施設において、2006年４月から2007年８月までの期間に、心理臨床的実践（カウンセリング・遊戯療法・箱庭療法・描画療法）を通して出会った子どもの中から３名の子どもをサンプルとして取り上げ、その状態像を記述し、DVの影響について分析・考察する。さらに、子どもたちおよび子どもが育つ環境としての親（特に母親）への援助はどうあるべきかについて考察する。

Ⅲ．研究の結果と考察

筆者らが関与した子どもたちは女児４名、男児７名。年齢は５歳から13歳までで、平均年齢は9.1歳である。

子どもたちおよびその親のプライバシー保護のため、個人が特定されない配慮を行って記述する。

１．DVにさらされた子どもの状態像分析とDVの影響についての考察

以上の11名の子どものうち３名の子どもについて、DV被害当事者である母親との関係に着目し、間主観的アプローチによる状態像の記述を基に、心理的側面の分析・考察を行う。

① A児（男児、６歳）

３人きょうだい（４歳の弟、２歳の妹）の長男。A児は乳児期より父親の母親に対する身体的・心理的暴力を目撃して育ってきた。施設入所後、両親は離婚し、母親が親権を取っている。A児は時折母親に父親のことを聞き、「どうしてパパに会ったらだめなの」と言う。そのような子どもの訴えに対し、母親は困惑を示す。母親は暴力を受けたことから、自己評価が低く、すべてにおいて自信がない。育児に対しても「どのように子どもとかかわったらいいのか分からないのです」と言う。母親の心身症の症状が悪化している時は、A児が弟と妹の世話をしている。このことは暴力の目撃という傷を負いながらも、困難に立ち向かっていくA児の潜在的な力のあらわれだと言えよう。このような力をWolinら（1993）[3]およびCyrulnik（2001）[4]は「リジリアンス」という概念で説明している。

一方、A児は時として母親への甘えを爆発的に表出し、弟へのすさまじいきょうだい葛藤をあらわにする。なお、A児の知的発達に遅れは観察されない。A児は筆者との個人セラピー時における箱庭療法において、初期段階では「死体がある」「怪獣が死んだ」と叫び、DVによるトラウマの兆候を示していた。

A児は乳児期より母親に対する父親の怒声や暴力にさらされ、きわめて不安定な養育環境に置かれてきた。E. H. Eriksonは乳児期における発達課題を基本的信頼感・安定感であると述べているが、A児の場合はそれらを培う良好な環境が欠如していたのである。そのため欲求の不充足感と他者への不信感を抱き続けている。このような子どもの状況を、Bancroftらは、次のように指摘している。「暴力の現場に居合わせた子どもには、母親との親密なやりとりが何より必要であるが、母親自身が精神的ショックや身体的損傷をはじめとするDVの影響をもろに受けていると、子どもの気持ちに寄り添ってやることはきわめてむずかしい。自分がもっとも母親を必要としているときにかまってもらえなかった結果、母親はやさしく頼れる存在だという子どもの思いは大きく裏切られることになる」と[5]。さらにBancroftらは、「父親を、失望、苦しみ、混乱をもたらす者とみなし、父親を攻撃することを空想する一方で、父親との絆を深めたいと願うアンビバレンスが存在する」と述べている[6]。これらの指摘は、A児の心理状態の説明にも適用できる。

② B児（女児、8歳）

2人きょうだいの第2子で、10歳の兄がいる。施設入所後、両親の離婚が成立し、親権は母親が取っている。B児が4歳の頃より、父親は母親に身体的・心理的・性的暴力を振るうようになる。B児は、父親のことを「想い出すと、怖かった。友だちが遊びに来ている時、大きな声を出すので、友だちが帰ってしまい、寂しかった」と言う。B児は、施設や学校生活においてささいな刺激によって興奮しやすく、攻撃的な言動をとることが多い。感情のコントロールができず、他児とのトラブルが絶えない。他児と仲良くしたい思いは強く、気に入った子どもに接近するが、拒否されると攻撃的言動をとる。発達障害とは認められない。母親はB児を手に負えない子どもと感じており、母親に対するB児の強い愛情欲求は満たされていない。なお、B児の兄の方は、母親の気持ちを理解する良い子であると母親は認めている。

B児は常に他児から挑発されているとの緊張感を抱いており、ささいな刺激にも衝動的に反応していることが観察される。このような子どもの状況に関し、Bancroft らは、父親の暴力を目撃して育った子どもは、相手が挑発してくる場合、暴力は許されるというメッセージを受け取っていると指摘している[7]。

B児のセラピー場面では、B児に治療者の関心が向けられ、B児の欲求が充足されるため、安心して自分を表現できていることが観察される。他児から排除された悔しさや寂しさが描画療法や箱庭療法のテーマになることが多い。さらに、B児の願望が表現される場合、家族や友だちと仲よく暮らしたいとの思いが力強く表わされた。このように愛情や友情を基盤に暴力のない生活を願望していることを表現できることは、B児のもつ未来に対する希望でありトラウマから回復していく潜在的な力、すなわちリジリアンスをあらわすものであろう。

③ C児（男児、12歳）

3人きょうだいの長男で、10歳の弟と7歳の妹がいる。施設入所後、両親の離婚が成立し、親権は母親が取っている。

C児は父親と母親が激しいけんかをしていたことは幼児期から知っていたと言う。「そんな時、おやじからいつも『あっちに行け』と言われた。」きょうだい3人で別の部屋に居たが、母親に対する父親の怒声が家中に響いていた。「おやじは怖かった。叩かれたり、殴られて鼻血が出たこともある」、「家を離れて、遠いところに来ることは嫌だったが、おやじが悪いので、こんなことになってしまった」と言う。C児は、母親に身体的・心理的暴力をふるう父親に対して否定的な感情を強く抱いている一方で、遊んでもらった体験を懐かしく思い出すなど、父親へのアンビバレントな感情が顕著に観察された。

また、C児は発達的過程としては反抗期にあるにもかかわらず、自分の感情表現はほとんどせず、しばしば無気力な状態に陥ることが観察される。このことは、母親の不安定な感情を受け止め、良い子としての適応を優先するため、自分自身の内的欲求に気づきにくい状況をつくりだしていることに起因する。個人セラピー場面でも、感情を言語化しようとはせず、セラピストである筆者に受身に適応しようとしていることが観察される。しかし、C児が母親の気持ちを優先し、母親が泣いているときには慰め役となるというような行為は、対人関係を築く上で必要な他者に共感する感受性、すなわちリジリアンスを内在化していることを示すものであると言えよう。

2. DVにさらされて育った子どもへの援助についての考察

以上述べてきたA児、B児、C児に対し、個人セラピー（カウンセリング、遊戯療法、箱庭療法、描画療法）を実施する上で、まずは、基本的安定感を育むことを目標にした。子どもたちの心身の安全が守られる施設環境の中で、とりわけ面接室という自由で守られた時空間において、子どもたちは徐徐にトラウマとなっている体験を表現することが可能になっていった。言葉で、あるいは遊びを通して表現された子どもたちの不安感、恐怖感、悲しみ、大人への不信感、無力感をセラピストが共感しようとする姿勢に支えられ、子どもたちの心に安定感が育まれ、自尊感情とセラピストへの信頼感を確かなものとすることができていったのである。

Bancroft らは、DV にさらされた子どもたちへの援助に不可欠なことの1つとして、「DV を目撃したことによって子どもが受けたトラウマティックな影響を癒す手助けをすること」をあげている[8]。さらに、セラピストに対しても示唆的な助言を次のように具体的に提示している。

・DV にさらされた子どもたちに、加害者に対する恐れや怒り、悲しみ、愛情というようなさまざまな感情を表出してもよいという安心感を与えること。

・加害者の行為は批判しても、加害者の人格を攻撃するような言葉（「あなたのお父さんは悪い人だ」など）を使わないように配慮すること。
・加害者への愛情を捨てなければならないというプレッシャーを子どもに与えないと同時に、家庭のなかに暴力があったことを話したり、それによってどんな影響を受けたかを話しても、加害者への裏切りにはならないことを理解させることが大切である。
・子どもは、母親が耐えてきた過去の暴力についての情報を必要としている。しかし、すべてを知らせるのではなく、年齢に即した伝え方を配慮しなければならない。子どもを怖がらせたり、苦痛を感じさせるような事柄を伝えることは避ける。どこまで子どもに伝えるかを決める際、次の２点を考慮し、両者のバランスをとるようにする。一方では、情報が少なすぎると子どもは混乱し、自分を責めることになりかねないうえ、母親にはどうにもならなかった状況を自分のせいだと考え、母子間の溝を深めてしまう恐れもある。他方では、情報を与えすぎると子どもの恐怖心をあおり、母親の身の安全や精神的苦痛に対する責任は自分にあるという重荷を増すことになりかねない。
・子どもが加害者の暴力についてすでに知っていることを慎重に聞いて、そのことについて知っているのは自分だけだという重荷から解放し、そのことについて自由に話してもよいという気持ちにすることも重要である[9]。

以上の見解は、DV にさらされて育ってきた子どもたちへの援助を行う際の示唆となる。

３．母親への援助についての考察

A児、B児、C児の個人セラピーに並行して、母親へのカウンセリングを実施してきた。暴力の被害当事者である女性への援助が重要なことは言うまでもない。しかし、本稿においては、子どもへの援助に焦点を合わせ、その側面から母親への援助について考察したい。

DV のある家庭の母親と子どもの関係について、Bancroft らは次のことを指摘している。暴力によって母親は心身ともに多くの傷を受けるが、この傷が子どもの世話をすることを困難にする場合がある。母親は身体的暴力や心理的暴力によって、抑うつ状態や、自信喪失、自尊感情・自己評価の低下が顕著にあらわれることが多い。そのため、子どもの要求に気づくことができなくなり、子どもと衝突することもしばしば起こってくる。つまり、子どもは母親への強い愛情欲求があるにもかかわらずそれが満たされないことへの腹立ちを覚えるのである[10]。

一方、DV 被害者である母親は、加害者である夫から暴力によって母親としての権威を傷つけられていることもある。たとえばDVにさらされて育つ子どもは、母親に対して軽蔑的な態度をとることがある。それはBancroft らが指摘するように、「子どもは、加害者の行動に込められたメッセージを吸収し、それが子どもの母親に対する態度を形づくる」[11]からである。また、DV にさらされて育つ子どもは、加害者に対する激しい怒りを母親に向けることがある。それは、DV の場面を見て育つなかで、パワー関係を学習し、パワーをもつ父親には直接怒りをぶつけにくいためである。このように男性である父親と女性である母親とのパワー関係を学習する中で、子どもは「男性は支配権を握り、女性は服従すべきである」とするジェンダー役割を身につけ、将来恋人や夫婦関係において再び暴力が起こる関係性のなかに取り込まれていくことになる。

以上のことから、子どもたちは父親へのアンビバレンスと同様、母親にもアンビバレンスを抱き、非常に不安定な心理状態に陥っていると言える。DV にさらされてきた子どもたちのトラウマからの回復力を高めるためには、とりわけ、母親との間に良好な関係があることが、子どものトラウマからの回復にきわめて有効である。そして何よりも、暴力を振るわない大人との信頼関係を個人的にも社会的にも形成することが重要となる。したがって、母親が社会的な援助を活用して、心身の安定と自尊感情を取り戻し、低下させられた自己評価を修復し、エンパワーメントすることが不可欠なのである。

４．子どもと母親のリジリアンスについての考察

前節において、DV にさらされて育ってきた子どもは、トラウマに苦しみながらもリジリアンスを失っていないことが明らかになった。

一方、DV 被害当事者である母親たちも、暴力の影響による母子関係の困難を抱えながらも十分な子育てをしたいという意欲、すなわちリジリアンスを失ってはいないことが筆者らの母親面接において確認された。

経済的には、施設入所直後から母親は就業する必要に迫られるが、DV 被害女性は、A児の母親のように

心身症や抑うつ状態のため直ぐには就業することが困難な場合がある。しかし、多くの母親は直ちに就業している。B児の母親は資格を活かしてフルタイムで就業をしており、C児の母親はパートタイム就業をしている。このように、DV被害の傷が癒えない状況にあっても、母親は子どもを養育しながら、生きていく力を引き出していることが認められる。

DV被害女性がリジリアンスを機能させるに際しては、本人の力だけでなく施設の母子指導員の適切な助言・指導が有効に作用していることが、母親面接を通して確認された。たとえば、A児、B児、C児の母親はいずれも離婚手続きによって親権を取得している。母親たちは筆者らセラピストとの面接場面を活用して、しばしば子育ての難しさを話題にし、適切な子育ての方法を見つけようとしている態度が見られた。また、施設職員によって地域の子育て支援サービスの情報が提供されており、それを積極的に活用している姿が見受けられる。

このように、施設および地域の関係機関職員による支援ならびに地域の子育て支援が、DVによって心身共に傷つき、自己評価が著しく低下していた母親たちにいかに有効であるかは、A児、B児、C児の母親たちの回復プロセスからも明らかである。

一方、子どもたちにも、暴力のある環境から離れて、施設という守られた環境の中で、児童指導員からの援助や指導のもとに、暴力を振るわない大人との良好な人間関係を築く機会が提供されている。入所している子ども同士のかかわりにおいても、遊びや学習、レクリエーションを共有する中で、肯定的な側面だけでなく、けんかや仲間はずれなどの否定的な側面も経験しつつ、児童指導員やセラピストの援助を得て、対人関係のスキルを身につけていくことができる。

このようなDVにさらされて育ってきた子どもや被害当事者である母親たちがトラウマに苦しみながらも回復していく力を、Wolin & Wolin (1993) は、「苦難に耐えて自分自身を修復する力」として「リジリアンス」という概念で説明している[12]。また、Cyrulnik (2001) もリジリアンスについて、「人は傷ついても、その傷を基に自分の人格をいっそう発達させる『心のしなやかさ＝リジリアンシィー』を育むことができる」と述べている。さらに、Cyrulnikは、リジリアンスを個人の中にあるだけでなく、個人を取りまく人々との協働によって作りだされていくものであると指摘している[13]。「リジリアンス」とは、虐待やDV、親の離婚などを抱える家族などの理解から生まれた臨床概念であるが、近年では、実証的研究への取り組みが始められている。

したがって、DVの影響を受けて育ってきた子どもたちとDV被害者である母親たちの援助を行う際には、彼らが困難に立ち向かうことができるように、被害者のリジリアンスを十分に機能させ、エンパワーメントに向けて社会的な支援を実践することが必要であると考える。なお、Sally J. Cooper（1991）は、エンパワーメントを「人がみな生まれながらにもっている生命力・個性・感性といった内的資源としてのパワー（変化を生み出す力量）にアクセスすることによって、抑圧を跳ね返すことである」と定義している[14]。

IV. 今後の課題

以上、DVのある家庭で育ってきた子どもの心理的側面の分析、DVの影響、援助の実際とリジリアンスの視点を取り入れた援助のあり方について考察してきた。併せて、養育環境としての母親との関係に着目した考察を加えてきた。そのことをふまえて、今後の課題を考察する。

① ジェンダーの視点を取り入れたDV被害者およびその子どものためのプログラム開発

DVとは、配偶者や恋人など親密な関係にある相手からの身体的・心理的・性的・経済的・環境的暴力を指す。さらに、DVは、男性がパワーを用いて、立場の弱い女性をコントロールすることであり、これは個別の関係におけることであると同時に、男性と女性の社会における構造的力関係のあらわれでもあるという認識に立ち、被害者女性と子どものためのプログラムを実施する必要がある。

② DVにさらされた子どもたちを対象とした心理教育グループのプログラム実施

子どもたちの情緒面の回復とDVを正しく認識する能力の向上に取り組む。この心理教育グループにおいて、「セラピストは子どもと接する際、加害者の暴力や残酷性に関して中立的な立場を取ってはならない。一般に子どもたちは、これらの暴力行為が受け入れられるものかどうかで混乱しており、セラピストがどっちつかずの態度を取ることで、さらにこの混乱が増幅されかねない。不適切な行為は不適切だとはっきり伝え、その後、その行為が子どもの情緒に与えた影響について探るようにする」というBancroftらの助言は有益である[15]。

③ 被害者女性を対象としたサポート・グループのプログラム実施

被害当事者自身のリジリアンスを高めるプログラムと、暴力が母子関係に与える影響について考えるプログラムを組み入れる。このグループを実施する際、被害者に対し「悪いのはあなたではない」という免責性を強調し、「ナラティブ・コミュニティ」として「自分ひとりではない」という感覚を共有できるようにする[16]。

④ 教育の場へのDV防止プログラムの導入

ジェンダーに敏感でアサーティブな教育は、乳幼児期から導入することが重要であるため、保育所・幼稚園の保育者およびその他の子育て支援関係者に対してDVに関する研修を実施する必要がある。

⑤ DVの発見や防止のための地域社会におけるネットワークの構築

DV被害当事者およびその子どものリジリアンスを高めるためには、地域社会の支援が必須であるという観点から、支援のネットワークを構築することが重要である。

引用・参考文献

1）Bancroft, Lundy, Silverman, Jay G.: *The Batterer as Parent: Addressing the Impact of Domestic Violence on Family Dynamics*. 2002. Sage Publications.（幾島幸子訳『DVにさらされる子どもたち―加害者としての親が家族機能に及ぼす影響』金剛出版、2004）

2）笠原麻里：DVと子ども虐待：治療、Vol. 87（No. 12）、2005、3252.

3）Wolin, Steven J. & Wolin, Sybil: *The Resilient Self: How Survivers of Troubled Families Rise Above Adversity*, 1993.（奥野　光・小森康永『サバイバーと心の回復力―逆境を乗り越えるための７つのリジリアンス』金剛出版、2002）

4）Cyrulnik, Boris: *Les Vilains Petits Canards*, Odile JACOB. 2001.（斎藤　学監修、柴田都志子訳『壊れない子どもの心の育て方』KKベストセラーズ、2002）

5）『DVにさらされる子どもたち―加害者としての親が家族機能に及ぼす影響』幾島幸子訳、金剛出版、2004、70（原書はBancroft, Lundy, & Silverman, Jay G. 2002）

6）『DVにさらされる子どもたち―加害者としての親が家族機能に及ぼす影響』幾島幸子訳、金剛出版、2004、56（原書はBancroft, Lundy, & Silverman, Jay G. 2002）

7）『DVにさらされる子どもたち―加害者としての親が家族機能に及ぼす影響』幾島幸子訳、金剛出版、2004、42（原書はBancroft, Lundy, & Silverman, Jay G. 2002）

8）『DVにさらされる子どもたち―加害者としての親が家族機能に及ぼす影響』幾島幸子訳、金剛出版、2004、171（原書はBancroft, Lundy, & Silverman, Jay G. 2002）

9）『DVにさらされる子どもたち―加害者としての親が家族機能に及ぼす影響』幾島幸子訳、金剛出版、2004、172（原書はBancroft, Lundy, & Silverman, Jay G. 2002）

10）『DVにさらされる子どもたち―加害者としての親が家族機能に及ぼす影響』幾島幸子訳、金剛出版、2004、69（原書はBancroft, Lundy, & Silverman, Jay G. 2002）

11）『DVにさらされる子どもたち―加害者としての親が家族機能に及ぼす影響』幾島幸子訳、金剛出版、2004、41（原書はBancroft, Lundy, & Silverman, Jay G. 2002）

12）Wolin, Steven J. & Wolin, Sybil: *The Resilient Self: How Survivers of Troubled Families Rise Above Adversity*, 1993.（奥野　光・小森康永『サバイバーと心の回復力―逆境を乗り越えるための７つのリジリアンス』金剛出版、2002）

13）Cyrulnik, Boris: *Les Vilains Petits Canards*, Odile JACOB. 2001.（斎藤　学監修、柴田都志子訳『壊れない子どもの心の育て方』KKベストセラーズ、2002）

14）Cooper, Sally J: New Strategies for Free Children, Educational Information Center. 1991.（1995. 森田ゆり監訳、砂川真澄訳、『「ノー」をいえる子どもに』童話館出版）

15）『DVにさらされる子どもたち―加害者としての親が家族機能に及ぼす影響』幾島幸子訳、金剛出版、2004、176（原書はBancroft, Lundy, & Silverman, Jay G. 2002）

16）信田さよ子『DVと虐待―家族の暴力に援助者ができること』医学書院、101、2002.

17）下西さや子：被虐待児へのエンパワーメント・アプローチ―子どもとリジリアンスの視点から：社会福祉学、Vol. 47-1 (No. 77)、2006.

18）Gil, Eliana, *The Healing Power of Play: Working with Abused Children*. 1991. The Guilford Publications,

Inc.（1997. 西沢　哲訳『虐待を受け子どものプレイセラピー』誠信書房）

19) Myers, John E. B. et al. ed., *The APSAC Handbook on Child Maltreatment*. 2002. Sage Publications, Inc.

20) 奥山眞紀子：被害児童への治療・ケアのあり方に関する研究：平成18年度厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究事業）報告書、2007.

21) 『間主観的アプローチ臨床入門ー意味了解の共同作業』バースキー，p. 他著、丸田俊彦他訳、岩崎学術出版社、2004.

A Study of Supports for Children Affected by Domestic Violence (DV)

Yasuko Mimura*, Yumi Rikitake**

<Abstract>

The innovative aspect of this study is that the impact of domestic violence (DV) on children and their mothers and supports for both of them were clarified as follows: first, children affected by DV showed a negative psychological phase, such as a restraint of emotion, lethargy, or outbursts of rage; second, mothers abused by DV held lower self-esteem; third, both children and their mothers who had been affected by DV have still resilience in spite of their trauma.

Three subjects—a 6-year-old boy, a 8-year-old girl, and a 12-year-old boy who live in a welfare facility—were observed and their verbal and behavioral acts were analyzed by using a clinical-psychological approach including main counseling, sand play, and art therapy. Their mothers, one of the factors of children's growing environment, were also observed with an intersubjective approach and their verbal and behavioral acts were analyzed through counseling by a clinical-psychological therapist.

Key words: child-rearing environment, domestic violence, intersubjective approach, resilience, empowerment, child care support

* Yasuko Mimura, professor emeritus, Department of Early Childhood Education and Care, Seinan Jo Gakuin University Junior College

** Yumi Rikitake, part-time lecturer, Life Study Department, Seinan Jo Gakuin University Junior College